

令和7年度 新富町立富田小学校 自己評価書

【4段階評価】 4:期待以上 3:ほぼ期待どおり 2:やや期待を下回る 1:改善を要する

◎ 本年度の重点目標 「個別最適な学びと協働的な学びによる学習の深化」「挑戦と自律を促す環境の構築」「安心安全な教育環境の構築」「信頼される学校づくりの推進」の取組の重点を軸に「心豊かに知性をみがき、郷土を愛するたくましい子どもの育成」に迫り、子ども、教師、保護者がともに成長する信頼される学校づくりを推進する。

評価項目	評価指標	具体的数値目標	方策・手立て	自己評価				結果の考察・分析及び改善策	学校運営協議会	
				児童	保護者	学校	総合			
学力の向上	個別最適な学びと協働的な学びの深化	学習習慣の確立	学習の約束が意識化され、実践できている学級100%をめざす。	授業準備、1分前着席、立腰の姿勢、聞く・話すときの約束、家庭学習を意識させることで、学びに向かう姿勢を整える。	3.4	2.5	3.4	3.0	【考察】 ○ 学習習慣の定着については、児童、学校は比較的高いが、保護者の評価は低い。家庭における学習習慣という点で、課題があると思われる。 ○ 本校の研究主題である「主体的・対話的に学ぶ」、「自らの学びを深める」児童の育成に向けた取組が、学校としてはまだ不十分であると言える。 ○ ICTの活用に関しては、ソフト面・ハード面において、さらに改善が必要である。 【改善策】 ○ 4月当初に「家庭学習の手引き」を配付し、最初の参観日の学級懇談の時に詳しく説明する。 ○ 引き続き、相互の授業参観を軸とした主題研究を中心に、全職員で授業力向上に努める。 ○ 本年度末に児童用タブレットがすべて入れ替わる予定である。操作について、職員研修を通して全職員で共通理解を図る。 ○ ICTを日常的に活用することが普通にできるようになり、児童・教師共にスキルが高められている。4年生以上の学年ではCBTによる単元テストを導入し、新たな試みも行った。タブレットの持ち帰り等ができるようになると、保護者の評価も変わってくると思われる。	2.7
		個別最適な学びと協働的な学びの推進	協働的な学びのよさを実感する児童90%以上をめざす。 「自調自考協働習熟」の学びに挑戦する児童100%をめざす。	「考えの視覚化→説明→議論」による納得解・最善解を生み出す協働的な学びの実践を行う。 「考えをもつ→協働的な学び→考えの広がり・深まり・新たな考えの創造」の流れによる「自調自考協働習熟」の学びを創造するとともに、「わかった、できた、進んだ、深まった」などの学びに対する感度を高める。	3.3	3.1	3.0			
	授業改善の視点を意識した授業の確立	「しんとみスタイル」、「ひなたの学び」を意識した授業を実践する教師100%をめざす。	協働的な学び、ICTの効果的活用、問いをもつ主体的な学び等を意識した授業実践による授業力の向上を図る。	3.2	2.7	3.1				
	教育者育成目標に応じた資質能力の向上	自分に必要な研修を受講し、資質能力を高める教師100%をめざす。	研修履歴を残しながら、自分に必要な学びを積み上げることで、自らの資質能力を向上させ、学び続ける教職員に迫る。			2.8				
	挑戦と自律を促す環境の構築	自分で考えて行動する自律した児童70%以上をめざす。	富田小を創っていくのは自分だという自覚をもたせ、「どんな学校(学級)をつくりたいのか」そのために「どうすればよいのか」という思考サイクルを育むことで、自ら学校の教育活動に参画していく楽しさと面白さを実感する児童の育成を図る。	3.0	3.0	2.9				
生徒指導・特別支援教育	非認知能力の育成	他者と協働し、目標を達成した経験のある児童80%以上をめざす。	4つの実感(自発性・有能感・関係性・帰属意識)を味わわせる機会や場を意図的に設定し、強さやしなやかさをもつ児童を育成する。	3.3	3.1	3.0	3.2	【考察】 ○ 自分で考えて行動する、という点では児童、保護者、学校すべてにおいて比較的自己評価が低い。どうしても、教師側の指示で児童が動く、という傾向が強いと考えられる。 ○ 人権尊重や個性を認め理解しようとする保護者や学校の意識が低い。 【改善策】 ○ 教師も、子どもに任せ、見守り、見届ける指導に慣れていないと思われる。挑戦できる環境を教師がつくっていく体制を整える必要がある。 ○ 業間の時間(昼休みと5時間目の間の15分間)に設定している「とんだっ子タイム」を活用し、学級における係活動や学校全体の委員会活動、また高学年においては学校行事にいたるまで、児童の自律を促す活動を計画的に行っていくとともに、その姿を称賛し、価値付けていく。 ○ 毎月の全校集会において、教師の話のほか、関連する委員会の児童からも呼びかけを行うなどして、児童自らが、よりよい学校を目指す取組に参加しているという実感をもたせる。 ○ 人権集会や人権教育に関する授業を中心に、児童の人権意識を高めていく。 ○ 教師も保護者も、年に1回は人権教育を受ける機会を設定していくことも検討する必要がある。	2.7	
	いじめ防止と不登校への組織的対応	いじめの認知と解決に向けた対応及び不登校児童への組織的支援100%をめざす。	いじめや問題行動並びに不登校児童に関する情報をSC、SSW、SS等を含めた職員で共有することで、支援や相談体制の強化を図るとともに、状況の改善に向けた組織的支援や居場所づくり、学習支援の検討を行う。	3.4	3.1	3.3				
	人権教育の充実	人権を尊重する児童100%をめざす。	違いを認め合うという価値観を育てることで、多様性を尊重し、守り守られる人間関係の構築を図る。	3.5	3.0	3.0				
	特別支援教育の充実	合理的配慮の提供を受けつつ、自立と社会参加の力を高める児童90%以上をめざす。	個の特性を理解し、よりよい行動形成や思考及び学習の仕方を習得させることで、その効果を実感し、自立と社会参加をめざす教育を推進する。	3.2	3.3	3.2				
	健康から身を守る教育と命を大切に教育	危険を予知する能力や回避する能力を高める児童80%以上をめざす。	「～したらどうなるか」という問いかけを繰り返すことで、危機を想定する力を高め、危険から身を守る力の育成を図る。	3.4	2.9	3.2				
健康安全教育	情報モラルの徹底と規則正しい生活習慣の維持・確立	メディアとの付き合い方について考え、行動できる児童80%以上をめざす。	デジタルシティズンシップ教育を推進することで、ネットワーク上のルールやマナーを身に付けた児童の育成を図る。	3.6	2.4	2.9	3.0	【考察】 ○ SNSやインターネット、ゲームなどのメディアコントロールに関しては、児童の評価は高いが保護者・学校の評価がかなり低い。学校と家庭とが一体となって、解決に向けて取り組んでいく必要がある。 【改善策】 ○ 情報モラルに関する授業を充実させたり、アンケートをもとに個別に指導をしたり、保護者向けの講演会を開催したりする。また、ノーメディアデーの設定など、家庭と連携した取組も行っていく。	2.4	
	健康教育の推進	自己の健康状態を知り、健康を意識して行動する児童60%以上をめざす。	食育をはじめ、各種検診結果を基に、健康を維持するために必要なことを考える機会を設定することで、健康意識の向上を図る。	3.3	2.6	3.1				
	家庭や地域との連携による読書活動の推進	町読書推進委員会主催のバストリーダー賞を達成する児童70%以上をめざす。	学校図書室と委員会活動、更に家庭や読み聞かせサークル、町図書館との連携を図り、読書を促すための具体的取組を行うことで、バストリーダー賞を目指し、図書に親しむ環境づくりを行い、読書活動を推進する。	3.0	2.5	3.2				
家庭・地域社会との連携	ふるさと学習の充実	地域素材や地域人材を活用した(ふるさと)学習の実施100%をめざす。	学校運営協議会や地域学校協働本部と連携し、地域素材の活用や地域人材の協力を得ることで、ふるさと学習を充実し、地域に密着し、地域に愛着をもつ児童の育成を図る。	3.3	2.7	3.0	2.9	【考察】 ○ 読書活動に関しては、児童・学校と保護者との間で評価に大きな差が見られた。環境づくりはできているが、児童の読書意欲の向上にはつながっていないのではないかと考えられる。 また、個人差や学年差も大きいと思われる。 ○ どの学年もふるさと学習が充実しており、児童のふるさとへの愛着も大変強いと考えるが、保護者とは意識の差がみられる。 【改善策】 ○ 読書支援員、PTA、ぶーふーとも今後連携していき、児童の読書意欲の向上に努める。また、図書委員会を中心に、児童自らが読書に慣れ親しもうとする雰囲気をつくっていく。	2.7	
	学校運営協議会との連携	学校運営協議会と連携した活動を行う。	学校運営協議会と連携した活動を模索することで、学校と地域の協働・支援体制を構築する。			2.9				